

K-698

山形県西村山郡大江町

あてらざわ

左沢楯山城跡調査報告書(10)

2008

大江町教育委員会

山形県西村山郡大江町

あてらざわ

左沢楯山城跡調査報告書(10)

2008

大江町教育委員会



左沢楯山城跡から見る城下町と最上川



左沢楯山城跡全景

序

左沢楯山城跡調査委員会が、着実に一年を歩みつづけ、強い否定に戦いながらも、確かな肯定に導かれ、報告書を世に問うことができますのは、「友だち力」によるのであります。私事一切を、公の歓びに置き換えた、実に美しい「友だち力」であり、正に、「朋在り……」であります。ふつつかな我等を「友人」とし、ご教導下さいました文化庁・山形県・山形県埋蔵文化財センター・関係碩学諸氏に衷心より御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

19年度の発掘調査は、居館と推測される元屋敷地区で行い、掘立柱建物跡と、16世紀～17世紀の遺物が確認され、「山城」と今回調査を実施した箇所（元屋敷A1）が同時期に活用されていた証左を得たのであります。「専守防衛」を旨とした「山城」と「生業」の場である「元屋敷」とを、「人々」はいかなる「点と線」で結んでいたのでありましょうか。人と人とが関わり合う中、家族・隣人・集落・村落……と広がる「現実社会」に、今日的な課題でもある「私人と公人」の関係構築を、「人と人」は見事に昇華させ、政治と文化と生活を結合させ凄まじいまでの生きる力としてきたのであります。

今年は、第15回全国山城サミットが本町で開催される予定であり、左沢楯山城が、全国に発信されるわけであります。全国からお越しになる「友だち」から、私たちは「力」を戴けるものと、勝手ながら予断し、すでに準備を始めさせていただいているのであります。必ずや、全国の「友だち力」は、左沢楯山城に大きな今後の方向性を与えて戴けるとの確信を、昨年の広島県三原市で開催された全国山城サミットで抱いたのであります。「全ての道は、ローマに通ず」の如、広島県三原市がローマ世界に重なり、Demo-crazyは、Demos-crazy、と読み取れ、Demosは大衆・人々・町民・友だちとなり、crazyは、権力・統制・力であり、実に民主主義の原義は、「友だち力」であります。「山城」と「民主主義」と「友だち力」の想念は、現代を解き、未来を拓く課題となり、安全・安心・平和な共生社会へ案内する重くて大きな命題であります。全国山城サミットに、心から皆様のお越しをお待ち申し上げます。

細くて、弱い歩みであっても、外部評価を戴ける感謝の念に思いを致し、「継続は力なり」を信じての調査であります。今後とも本調査に係る事業に、ご理解とご教示を賜りますようお願いを申し上げます。

平成20年3月

大江町長 渡邊兵吾

例 言

- 1 本報告書は平成 19 年度に大江町教育委員会が国庫補助を受けて調査を実施した左沢楯山城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査要項は下記の通りである。
 - 遺 跡 名 左沢楯山城跡
 - 所 在 地 山形県西村山郡大江町大字左沢字楯山
 - 調 査 主 体 大江町教育委員会
 - 調 査 期 間 平成 19 年 9 月 10 日～ 10 月 25 日
 - 調 査 事 務 局 教育文化課長 毛利登志浩
社会教育主幹 木村 誠
社会教育主任 日下部美紀
 - 調 査 担 当 者 社会教育主任 日下部美紀
 - 調 査 指 導 文化庁 山形県教育庁教育やまがた振興課 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 3 調査を実施するにあたり左沢楯山城跡調査関連委員会を組織し、ご助言をいただいた。委員の方々は下記のとおりである。(敬称略、五十音順)
伊藤清郎 入間田宣夫 大場雅之 片桐隆 金山耕三 川崎利夫 北畠教爾 佐藤庄一 鈴木勲 田中哲雄
菅田慶信 宮本長二郎 横山勝栄
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、次の方々及び機関よりご指導、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)
財団法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤邦弘 坂井秀弥 佐々木浩一 高桑登 丸吉繁一 山口博之
- 5 発掘調査の作業にあたっては以下の方々からご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)
川口邦美 菊地泰子 佐竹与惣次 林與惣治
- 6 委託業務は下記のとおりである。
株式会社セビラス
- 7 出土遺物、調査記録類については大江町教育委員会が一括保管している。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S B…掘立柱建物跡 S K…土坑 S D…溝跡

S P…柱穴・ピット S A…柵跡

2 ATJ は左沢楯山城跡の略であり、A1 は元屋敷を示す。

3 報告書執筆基準は以下のとおりである。

- (1) 遺構図に付する座標値は、平面直角座標第X系により、高さは海拔高で表す。
- (2) 遺跡位置図、地形図、縄張図、遺構配置図の方位は真北を示している。
- (3) 遺構実測図は 1/20 のスケールで採録し、各々スケールを付した。なお、断面図の水糸レベルは標高を表し、単位は m である。
- (4) 遺構実測図は、各々スケールを付した。
- (5) 遺物の色調の記載は『新版標準土色帖』に準拠した。

目次

1	調査の経緯	1
	(1) 調査に至る経緯	1
	(2) 調査の方法と経過	1
2	遺跡の立地と環境	3
	(1) 地理的環境	3
	(2) 歴史的環境	4
3	遺構と遺物	10
	(1) 基本層序	10
	(2) 検出遺構	13
	① 掘立柱建物	13
	② 土坑 (SK11 ~ 14)	15
	③ 溝 (SD10 ~ 17)	15
4	遺物	19
5	まとめ	23

表

表1 遺物観察表	20	表2 出土陶器変遷表	22
----------	----	------------	----

図版

第1図 遺跡全体図	2	(SB80・82・83・84・85・87・91・93・95)	
第2図 地形分類図	5	第9図 掘立柱建物	17
第3図 遺跡位置図	6	(SB81・94・96・97・98)	
第4図 縄張図	7	第10図 掘立柱建物	18
第5図 調査区設定図	9	(SB86・88・89・90・92・95)	
第6図 基本層序	11	第11図 出土遺物 (1)	24
第7図 遺構配置図	12	第12図 出土遺物 (2)	25
第8図 掘立柱建物跡	16	第13図 出土遺物 (3)	26

写真図版

巻頭写真	写真図版 5
写真図版 1	写真図版 6
写真図版 2	写真図版 7 出土遺物 (1)
写真図版 3	写真図版 8 出土遺物 (2)
写真図版 4	写真図版 9 出土遺物 (3)

1 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

左沢楯山城跡の調査は、平成5年度の「左沢楯山城跡関連調査検討委員会」の発足に始まる。調査の経過
城跡の歴史や立地・構造などの調査検討を経て、保存すべき貴重な文化財であることを確認した。

平成6年度から名称を「左沢楯山城遺跡関連調査委員会」に改め、資料収集や文献調査、試掘調査を実施し、城跡のおおまかな構造や部分的な性格の一端を把握した。平成10年度からは、大江町教育委員会が主体となり、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業として国庫補助金を受け、城跡の範囲・遺構の性格・時代等を明確にするための発掘・縄張調査に着手した。城跡の範囲は東西1300m、南北600mの広大な地域を想定しており、これを立地などからA～Dの4地区に分類している。その中で、D地区については、各地区との構造の違いなどから中世城館としての遺跡範囲になるかの調査検討が必要な地区である。

平成17・18年度は、これまでの調査をまとめて史跡として遺跡の保存・整備・活用に向うための基礎的な資料作成を目的とし、名称を「左沢楯山城跡調査報告書編集委員会」とした。

その後、町の重要な文化財として、遺跡の保存・整備・活用を目的に、継続的な補足調査を実施し、現在に至っている。

(2) 調査の方法と経過

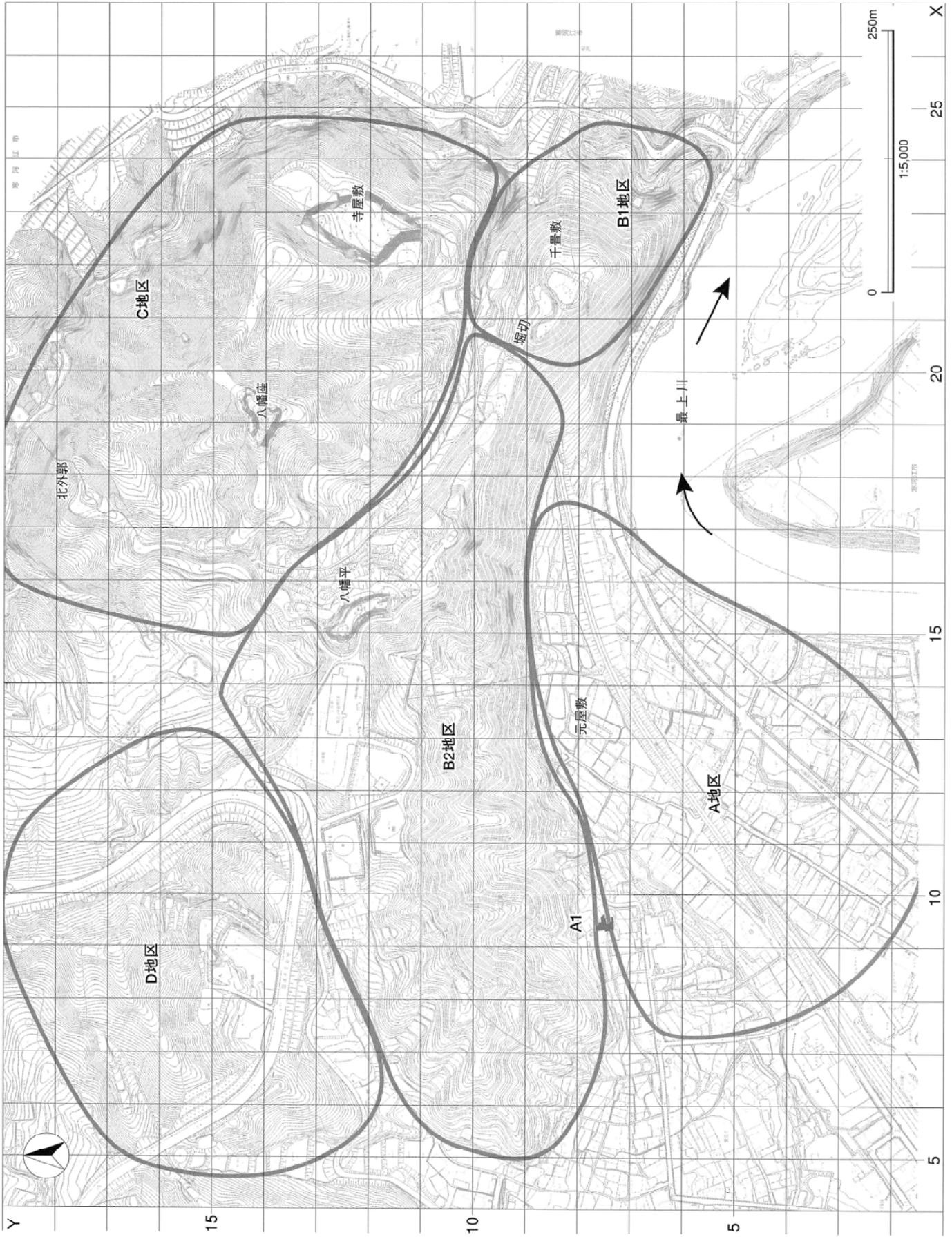
方眼座標の設定については、左沢楯山城の全域を囲むように、南北をY軸、東西をX軸とグリッド設定
し、1グリッドあたり50m四方の大グリッドを設定した。さらに、大グリッド一つを南から北へA～J、西から東へA～Jと5m四方の小グリッドに分割した。よってグリッドの番号を「大グリッド南北・大グリッド東西・小グリッド南北・小グリッド東西」の順で「0000AA」のように6桁の数字とアルファベットで示した。基準となる0000AAグリッドの国土座標は、平面直角座標系第X系： $X = -179,550.00$ 、 $Y = -53,850.00$ である。

平成18・19年度の2カ年にわたり、左沢楯山城跡のA地区の調査を実施した。この地区は、家臣の住居が存在したと考えられる元屋敷を中心とする地区である。今回の調査地区はA1とする。発掘調査経過

調査期間は、平成18年度は11月7日から11月28日まで、平成19年度は9月10日から10月25日まで実施した。平成18年度は曲輪の中央に2トレンチ、そこから南に一段下がった曲輪に東西に1トレンチを設定した。平成19年度は平成18年度の試掘トレンチを中心に曲輪全体に調査区を拡大した。全体の調査面積は165.0m²である。

草刈をした後に、手作業により表土を除去し、遺構や遺物の出土状況を観察しながら、面整理を実施した。写真・図面等による記録を行い、埋め戻しを行い調査終了とした。現地での調査期間は36日間である。

1 調査の経緯



第1図 遺跡全体図

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

山形県大江町は、山形県のほぼ中央部、村山盆地の西部に位置し、朝日山地小朝日岳 (1647.0m) より源を發し、大江町の中心部である左沢で最上川に注ぐ延長 24.2km の月布川が横断している。月布川は上流部を古寺川とも言い、旧河川名は漆川であった。月布川の幅は狭く、ごく幅のせまい河岸段丘面が連なっており、南北方向に交わる谷の開折がよく發達しており、これらの各支流との合流点には多くの歴史を語る集落が立地している。町はその川沿いに東西 19.0km、南北 12.0km と東西に細長い区域である。左沢で月布川が注ぐ最上川は、総延長が 224.488km であり、山形県を縦断し、流域面積は県面積の 75.5 % を占める。最上川は置賜方面から五百川溪谷を経て大江町に入ってくるが、五百川溪谷は難所となっている。ここは川幅 100m 前後で、河岸はもろい堆積岩からなり、川床に岩石が露出するなど、最上川舟運時代には通行は困難であった。この峡谷には河岸段丘が發達し、小盆地がいくつか形成されており、河川の旧流路による還流丘陵も見られる。左沢周辺にはこのような難所と呼ばれる場所があったようである。町の東は最上川を挟んで寒河江市に接し、北は西川町、南は朝日町と接している。

左沢楯山城は、大江町大字左沢字楯山に所在し、白鷹町と朝日町との山間部溪谷である五百川溪谷を北流して大江町左沢に入る最上川が、急峻な楯山に突き当たり、流路を変え、大きく東へ屈曲して村山盆地へ流れ出るその屈曲部の稲沢山丘陵に立地している。

城跡の山頂の標高は 222.13 m、最上川水面の標高は 112.0 m 前後で、その比高は 110.13m である。城跡の東と北側は檜木沢 (楯の沢) の深い溪谷で防禦されており、さらに北側に富山 (標高 266.0 m)、東側に平野山 (標高 275.0 m) と鏡山 (標高 258.0 m) が連なる。南側は急崖をなし、眼下に最上川を眺めることができ、西側は通称「裏山」と呼ばれる丘陵で緩斜面となっている。

現在、西側は左沢から国道 112 号線 (月山新道) に至る国道 458 号線が通り、楯山と平野山の間には、平野山トンネルを経由して山形自動車道が走っている。

近世における左沢は、舟運の河岸として發達した。しかし、左沢河岸の發展は近世に始まったものではなく、字限図や絵図から見える中世左沢の河岸と町並は、近世河岸とは別に下流の元屋敷付近にあったことが想定できる。

陸上交通について、左沢は寒河江市柴橋へ通じる東への道、白岩・六十里越街道へ通じる北への道、大江町の月布川上流などの西への道、置賜方面など南への道が交差する位置にあり、交通の要衝の地であったと言える。これは大江氏・最上氏にとっては、領地の境目となる重要な地点であったことを意味し、左沢楯山城は、陸上交通の重要な拠点を押さえるためにも築城されたことが分かる。

この場所は舟運の難所や流通を掌握する物流の結節点であると考えられる。

(2) 歴史的環境

旧石器時代 大江町を含む西村山地方には、現在 276 箇所にあふ遺跡が確認されている。その多くは、最上川が作り出した自然堤防上や、寒河江川・月布川の河岸段丘上に点在する。良質な頁岩を豊富に産出するこれらの河川流域には、旧石器時代の遺跡が多く見ついている。中期旧石器段階の庚神山遺跡や、中期旧石器時代と後期旧石器時代の過渡期に位置付けられている明神山遺跡を始め、金谷原・望山・小見・下原遺跡がある。

縄文時代 縄文時代では、前期の大鉢・高瀬山遺跡があり、中期には藤田・十八才・大久保・小見・月布・南又・橋上遺跡などの遺跡がある。これらの遺跡の多くは月布川沿いの河岸段丘上に点在している。後期では望山・向田遺跡があり、晩期の遺跡としては道海・大久保平・青柳・長畑遺跡がある。

古代 奈良平安時代では、東北横断自動車道の建設に伴い多くの集落跡が調査されている。また、平安時代の須恵器窯である藤田遺跡がある。

中世 鎌倉時代の左沢は、寒河江荘地頭大江氏の支配下に置かれた。大江氏は、南北朝時代に入ると領内の主要な拠点に城館を築かせていく。左沢に築かれた左沢楯山城は、正平年間（1346～70）頃、七代大江時茂の三男元時により築城されたと伝えられる。以後、左沢氏を名乗り、最上川西部の西村山に勢力をのぼしてくるが、戦国時代末期の天正 12 年（1584）に最上義光に滅ぼされ、最上氏の支配下となるが、慶長 5 年（1600）の出羽合戦にも重要な位置にあったが、元和の頃廃城となった。

近世 最上氏が改易になった後、左沢は左沢藩領、幕府領庄内預り地、庄内藩領、松山藩領と変転していく。元和 8 年（1622）に酒井直次が入封すると、小漆川を隔てた西側台地上に新城（小漆川城）を築き、左沢楯山城は廃城となった。直次は、実相院・称念寺・巨海院などの寺社を移すとともに、内町・横町・原町・御免町などの町割りを行った。これが近世の左沢の町並みである。近世における左沢は、最上川舟運河岸として発展していく。



- | | | |
|----------------------------------|--------|---------|
| ■ 台地及び段丘 | ■ 河川 | ■ 崖 |
| ■ 山腹・山麓緩斜面、多くは地すべり
滑落地・崩積地・崖錐 | ■ 河原 | ■ 人工改変地 |
| ■ 谷底平野・氾濫原 | ■ 後背湿地 | □ 中・色斜面 |

第2図 地形分類図 (1 : 50,000)

【土地分類基本調査 左沢】1986 山形県の「地形分類図」を一部加筆したものである。



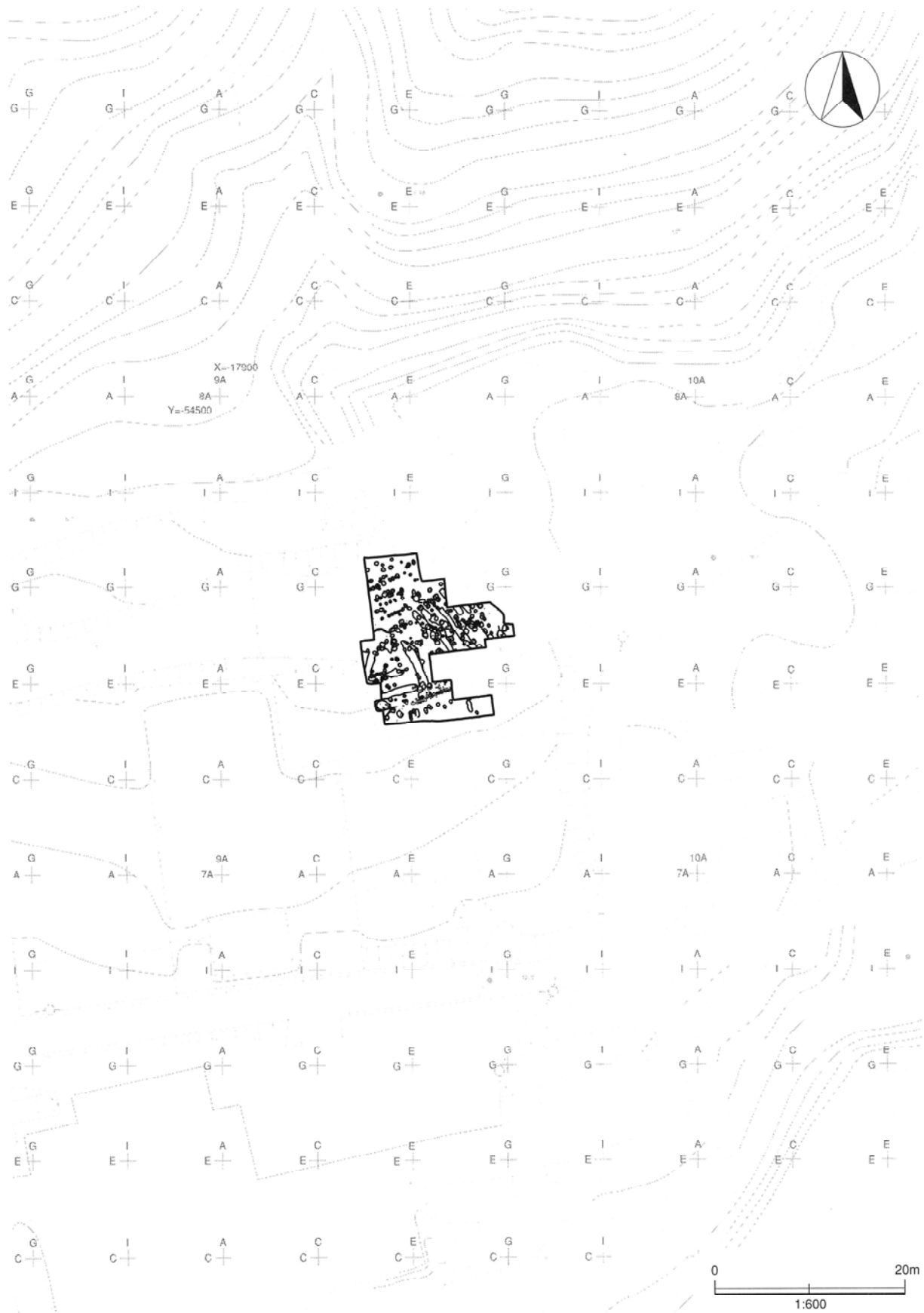
1	左沢櫓山城	14	松川橋	27	小見遺跡	40	用大丈館
2	陣ヶ峰要害	15	富山橋	28	藤田遺跡	41	登沢遺跡
3	陣ヶ峰橋	16	富山遺跡	29	手白橋	42	大隈遺跡
4	白岩本城	17	庚申山遺跡	30	富沢城	43	和合館
5	白岩八幡橋	18	霧沢館	31	藤田原遺跡	44	川前遺跡
6	白岩上橋山	19	顔好館	32	金谷原遺跡	45	沼向遺跡
7	谷沢屋敷	20	望山遺跡	33	明神山遺跡	46	ウシガシ遺跡
8	谷沢元屋敷	21	堂屋敷遺跡	34	うぐい沢遺跡	47	南山橋
9	桶沢橋	22	藪袋館	35	平塚経塚	48	岩谷遺跡
10	根際橋	23	岩木館	36	御貞寺館		
11	吉川館	24	日光山橋	37	田沢山館		
12	平野山古窯跡群	25	下原B遺跡	38	深沢館		
13	木の沢橋	26	下原遺跡	39	三百年橋		

第3図 遺跡位置図

年	縄張調査箇所
1998	千原敷周辺
	寺屋敷周辺
1999	八幡平周辺
	寺屋敷周辺
2000	八幡平周辺
2002	北外郭
2003	藁山
2004	藁山



第4図 縄張図



第5図 調査区設定図

3 遺構と遺物

平成 18 年度から 19 年度の 2 ヶ年にわたり発掘調査を実施した元屋敷地区 (A1) は、明治 21 年の字限図を見ると元屋敷と愛宕下の境目付近であり、居館・家臣の住居や寺院が存在したと考えられる地区である。山城の麓には傾斜の緩い土地が広がるが、調査地は B2 地区南西の麓に位置する。現在、実相院墓地の東側であり、南側には JR 左沢線が通っている。この場所は現在の左沢の町場から高台になっており、東側に置賜方面から北流する最上川と左沢橋山城の東端千畳敷まで見通すことができる。標高は 135.0m、面積は 240.0m² である。調査区として選定した理由については、この場所から当時の生活空間と考えられる元屋敷を一望できる高台であること、最上川や山城部分への眺望がきくこと、山城のすぐ麓であること等の立地条件が非常によいことが挙げられる。また、嘉永元年 (1848) の『鉄圍山巨海院古屋敷図面控』の中で、巨海院・実相院・称念寺が並ぶ東側に位置しており、ここに当時の居館跡または寺院跡を確認できる可能性があることから調査を実施した。

平成 19 年度は平成 18 年度に曲輪中央に試掘トレンチを設定し遺構の有無を確認した上で、曲輪全体に調査区を広げた。調査面積は 165.0m² である。

(1) 基本層序

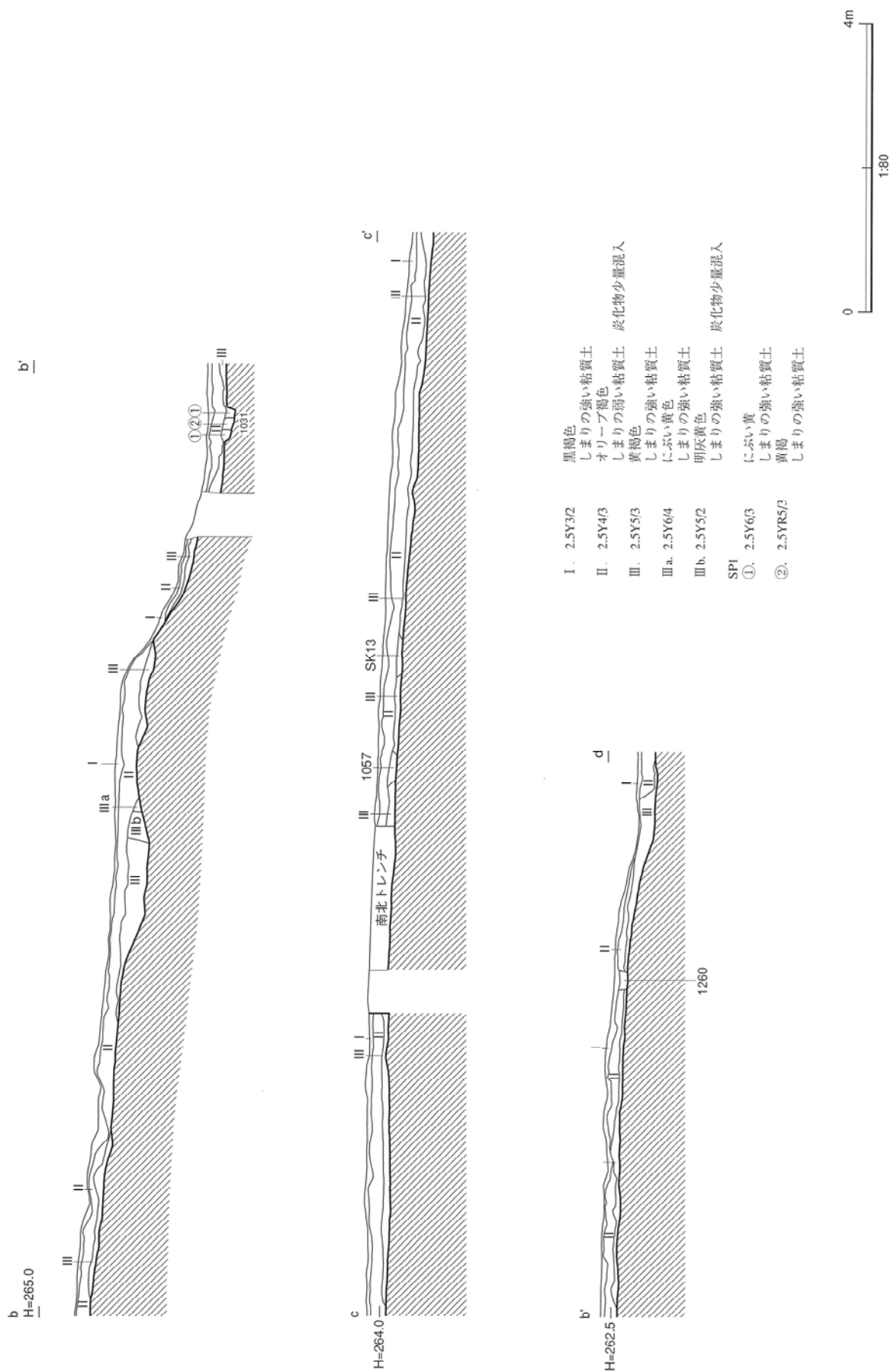
平成 18 年度試掘トレンチは、上段から下段の曲輪中央部に南北 13.0m × 東西 2.0 m、それに直行するトレンチを上段に南北 2.0m、東西 15.0m、下段に南北 2.0m、下段に 8.0m 設定した。表土から遺構確認面までの深さは、約 30.0cm である。

基本層序は、トレンチの上段から下段南北トレンチの西壁 (b-b')、上段東西トレンチの北壁 (c-c')、下段東西トレンチの南壁 (b'-d) に設定し堆積状況を確認した。

南北トレンチ西壁の基本層序 (b-b') は、I・II 層は現代の整地層である。I 層の整地層の厚さは 10.0cm 前後、II 層の整地層の厚さは 10.0～20.0cm であり、炭化物が少々混じる。III 層は 1 期の整地層であり、整地層の厚さは 15.0cm 前後である。この層を 1 期の遺構確認面とする。1 期の遺構は 1031 があげられる。

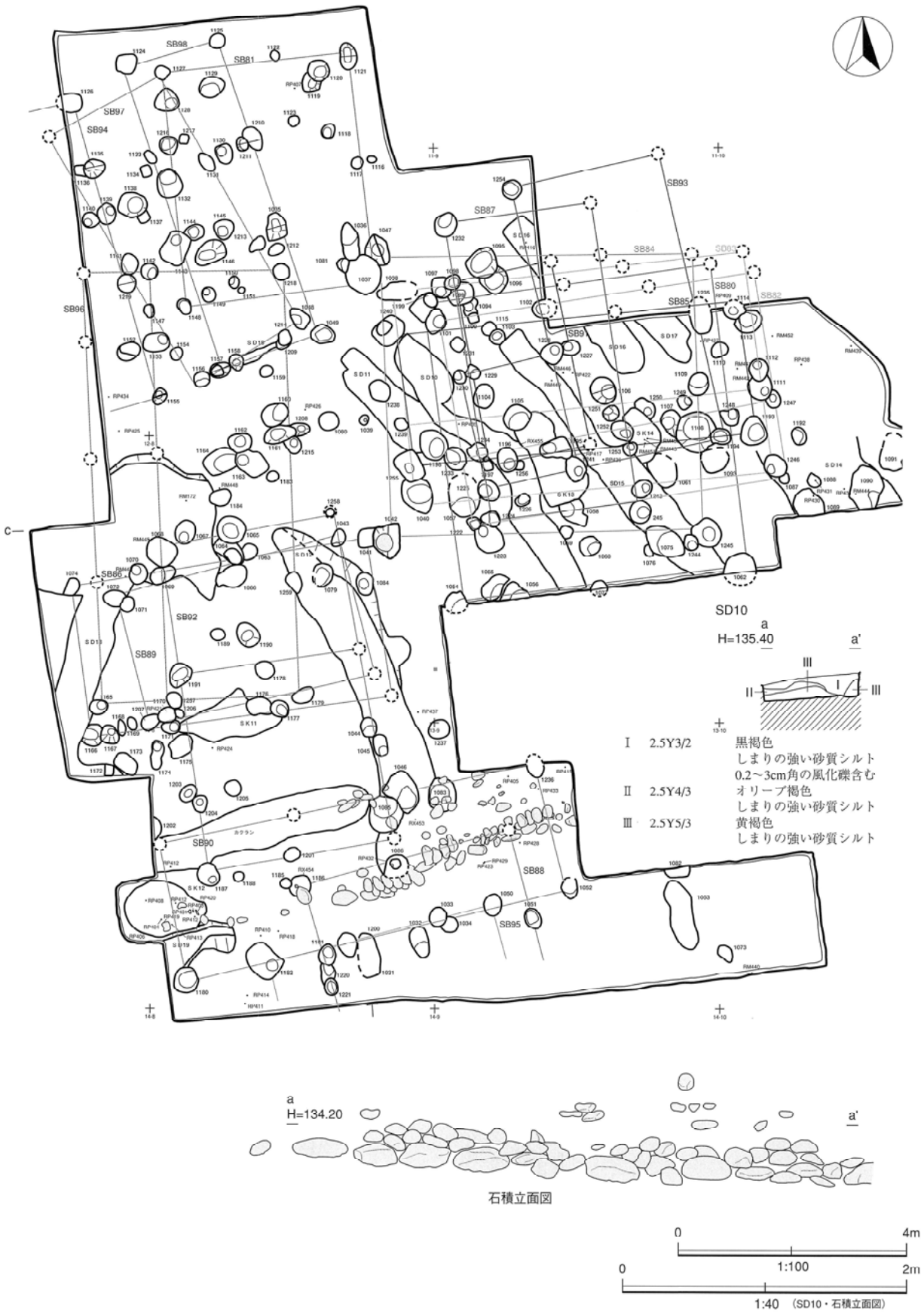
上段東西トレンチ北壁の基本層序 (c-c') は、I・II 層は現代の整地層である。I 層の整地層の厚さは 10.0cm 前後であり、II 層の整地層の厚さは 15.0cm 前後である。III 層は 1 期の露地であり、整地層の厚さは 15.0cm 前後である。この層を 1 期の遺構確認面とする。1 期の遺構は 1057、SK13 があげられる。

下段東西トレンチ南壁の基本層序 (b'-d) は、I・II 層は現代の整地層である。I 層の整地層の厚さは 15.0cm 前後であり、II 層の整地層の厚さは 15.0cm 前後である。III 層は、1 期の整地層であり、整地層の厚さは 10.0cm 前後である。この層を 1 期の遺構確認面とする。1 期の遺構は 1260 があげられる。



- I. 2.5Y3/2 黒褐色
- II. 2.5Y4/3 しまりの強い粘質土
- III. 2.5Y5/3 しまりの弱い粘質土 炭化物少量混入
- III a. 2.5Y6/4 黄褐色
- III b. 2.5Y5/2 しまりの強い粘質土
- SPI ①. 2.5Y6/3 にぶい黄
- ②. 2.5YR5/3 しまりの強い粘質土

第6図 基本層序



第7図 遺構配置図

(2) 検出遺構

今回の調査では多くの柱穴を確認しているが、建物として確認できたのは19棟である。遺構に関わる出土遺物が少ないため時期の判別が困難であったが、主に調査区上段東側に集中する建物の重複による柱穴の切り合いから数期の時期区分が想定される。いずれも1期の整地層より検出された。その他、溝跡8条、土坑4基、柱穴跡229基を検出している。調査区南側より検出された建物跡については、調査区外南側にさらに広がる。

①掘立柱建物

SB80・81は同じ軸方向であり、同時期であると想定される。SB80は調査区の上段東側に位置し、規模は南北桁行2間、東西梁行2間の南北棟建物である。建物の北東部の柱穴は調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性が高い。建物の軸方向はN-5°-Wである。柱穴の径は35.0～55.0cmの円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いからSB82よりも古いと考えられる。 SB80

SB81はSB80の西側に並ぶ。規模は南北桁行2間、東西梁行1間の南北棟建物である。柱穴の径は30.0～65.0cmの円形または楕円形を呈する。 SB81

SB82は調査区の上段東側に位置し、規模は東西桁行3間、南北梁行1間で南側に4尺幅の庇がつく東西棟建物である。建物の北東部の柱穴は調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性が高い。建物の軸方向はN-10°-Wである。柱穴の径は40.0～45.0cmの円形または楕円形を呈する。庇部分の柱穴の径は20.0～50.0cmである。重複する建物の柱穴の切り合いからSB83・84よりも古いと考えられる。 SB82

SB83は調査区の上段東側に位置し、規模は東西桁行3間、南北梁行1間で南側に4.5尺幅の庇がつく東西棟建物である。建物の北東部の柱穴は調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性が高い。建物の軸方向はN-5°-Wである。柱穴の径は40.0～45.0cmの円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いからSB84・85よりも古く、SB82よりも新しいと考えられる。 SB83

SB84は調査区の上段東側に位置し、規模は東西桁行3間、南北梁行2間の東西棟建物である。建物の北東部の柱穴の一部が調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性が高い。建物の軸方向はN-5°-Wである。柱穴の径は25.0～60.0cmの円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いからSB83より新しいと考えられる。 SB84

SB85・86は同じ軸方向であり、同時期であると想定される。SB85は調査区の上段東側に位置し、規模は東西桁行3間、南北梁行1間の東西棟建物である。建物の北東部の柱穴の一部が調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性が高い。建物の軸方向はN-5°-Wである。柱穴の径は25.0～50.0cmの円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いからSB83よりも新しいと考えられる。SB86は調査区の上段南西側に位置し、規模は東西桁行3間、南北梁行1間の東西棟建物である。建物の軸方向はN-5°-Wである。柱穴の径は25.0～35.0cmの円形または楕円形を呈する。建物の東側の柱穴1基がSD12にかかり明確に確認できなかったが、検出される可能性はある。 SB85
SB86

SB87は調査区の上段東側に位置し、規模は南北桁行3間、東西梁行1間の南北棟建物であ SB87

る。建物の軸方向は $N - 8^{\circ} - W$ である。柱穴の径は 25.0 ～ 40.0cm の円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いから SB84 より新しいと考えられる。

SB88 SB88 は調査区の下段南側に位置し、規模は南北 1 間、東西 2 間であり、建物が調査区外の南に広がると考えられる。建物の軸方向は $N - 3^{\circ} - W$ である。建物東側の北側柱穴 1 基は石積みにかかり明確に確認できなかったが、検出される可能性はある。柱穴の径は 35.0 ～ 55.0cm の円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いから SB90 より古いと考えられる。

SB89 SB89・90 は同じ軸方向であり、同時期であると想定される。SB89 は調査区の上段南西側に位置し、規模は東西桁行 2 間、南北梁行 1 間の東西棟建物である。建物の軸方向は $N - 15^{\circ} - W$ である。建物の東側の柱穴 1 基が SD12 にかかり明確に確認できなかったが、検出される可能性はある。柱穴の径は 30.0 ～ 60.0cm の円形または楕円形を呈する。SB90 は調査区の下段南側に位置し、規模は東西桁行 3 間、南北梁行 1 間の東西棟建物である。建物の北側の柱穴 2 基が攪乱によって消されてしまったが、柱穴があった可能性はある。柱穴の径は 30.0 ～ 70.0cm の円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いから SB88・95 より新しいと考えられる。

SB91 SB91・92 は同じ軸方向であり、同時期であると想定される。SB91 は調査区の上段東側に位置し、規模は南北桁行 2 間、東西梁行 1 間の南北棟建物である。建物の軸方向は $N - 10^{\circ} - W$ である。建物の北側の柱穴 1 基は調査区外のため確認できなかったが、検出される可能性は高い。柱穴の径は 25.0 ～ 30.0cm の円形または楕円形を呈する。SB92 は調査区南西側の上段から下段にかけて検出された。規模は南北桁行 3 間、東西梁行 2 間の南北棟である。建物の軸方向は $N - 10^{\circ} - W$ である。建物東側の柱穴 2 基は SD12 にかかり明確に確認できなかったが、検出される可能性はある。重複する建物の柱穴の切り合いから SB93 よりも古く、SB90 より新しいと考えられる。

SB93 SB93・94 は同じ軸方向であり、同時期であると想定される。SB93 は調査区の上段東側に位置し、規模は南北桁行 2 間、東西梁行 1 間の南北棟建物に 1 間 × 1 間の角屋が張り出している。建物の軸方向は $N - 14^{\circ} - W$ である。柱穴の径は 30.0 ～ 40.0cm の円形または楕円形を呈する。SB94 は調査区の上段西側に位置し、建物の東側のみの検出であるが、その規模は南北梁行 3 間である。柱穴の径は 30.0cm の円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いから SB80・81 よりも古く、SB91・92 より新しいと考えられる。

SB95 SB95 は調査区の下段南側に位置し、建物の北側東西 3 間の検出であるが、調査区外の南に広がると考えられる。建物の軸方向は $N - 15^{\circ} - W$ である。柱穴の径は 35.0 ～ 65.0cm の円形または楕円形を呈する。重複する建物の柱穴の切り合いから SB90 より新しいと考えられる。

SB96 SB96 は調査区の上段西側に位置し、規模は南北桁行 4 間、東西梁行 1 間の南北棟建物で、西側に 4 尺幅の庇がつく可能性がある。建物の軸方向は $N - 3^{\circ} - W$ である。建物西側の柱穴は SD13 にかかり、また調査区外であるため明確に確認できなかったが、検出される可能性はある。柱穴の径は 30.0 ～ 45.0cm の円形または楕円形を呈する。

SB97 SB97 は調査区の上段西側に位置し、規模は南北桁行 3 間、東西梁行 1 間の南北棟建物である。建物の軸方向は $N - 33^{\circ} - W$ である。建物の西側の柱穴 1 基は調査区外のため確認でき

なかったが、検出される可能性は高い。柱穴の径は 30.0cm 前後の円形または楕円形を呈する。

SB98 は調査区の上段西側に位置し、規模は南北桁行 3 間、東西梁行 1 間の南北棟建物である。建物の軸方向は N - 18° - W である。柱穴の径は 25.0 ~ 55.0cm の円形または楕円形を呈する。

SB98

②土坑 (SK11 ~ 14)

SK12 は、調査区下段西端より検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 1.44m、短軸 1.00m、確認面からの深さ 20.0cm である。遺物はⅡ期の陶磁器破片が 4 点出土している。16 世紀末の朝鮮の陶器碗が 2 点、17 世紀前半 (1610 ~ 1650) の唐津の溝縁皿 1 点、17 世紀の唐津 (二彩手) の甕 1 点が出土しているが、19 世紀代の肥前の皿が出土しているため、近世の廃棄土坑である可能性が高い。

SK12

SK11 は、調査区上段西側より検出された。平面形は不整長方形を呈し、長軸 1.5m、短軸 0.65m である。遺物は出土していない。

SK11

SK13 は、調査区上段東側より検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.70m、短軸 0.50m である。遺物は出土していない。

SK13

SK14 は、調査区上段東側、Sk13 の東側より検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 1.0m、短軸 0.5m である。遺物は釘などの鉄製品が 3 点出土している。

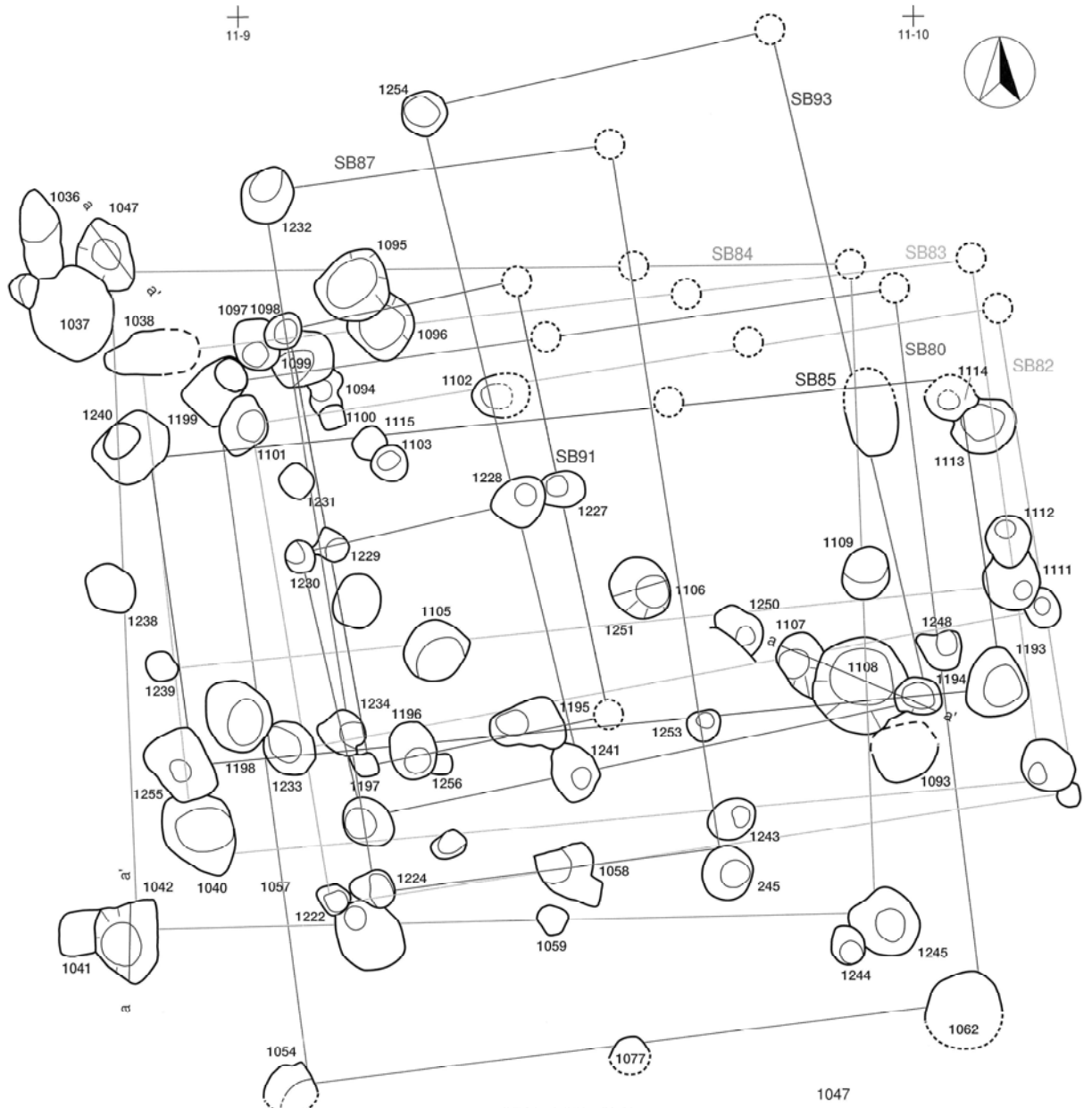
SK14

③溝 (SD10 ~ 17)

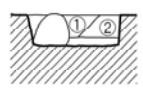
SD10・11・14・15・16・17 は、調査区上段東側に同じ軸方向で並ぶ。幅は 20.0 ~ 30.0cm であり、調査区外の南東へのびる可能性がある。遺構の切り合いから、調査区上段東側で検出される建物跡よりも古い溝であると考えられる。遺物は、SD10・15 から鉄製品 (釘) が 1 点、Ⅲ期の磁器片が 2 点、SD14 からは 17 世紀唐津 (二彩手) の鉢が出土している。

SD12

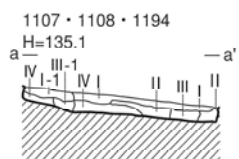
SD12 は、調査区西側の下段から上段にかけて西にのびる溝跡である。SD13 につながる可能性があり、それが調査区外の西側にさらにのびる可能性もある。調査区下段の曲輪と上段の曲輪をつなぐ道、または調査区東側から検出された掘立柱建物に係ることも考えられるが、検討が必要である。幅は 30.0cm 前後、確認面からの深さは 44.0cm である。遺物は出土していない。



1042
SW
H=265.0 NE a'

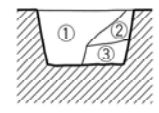


- ①. 2.5Y4/3 オリーブ褐
しまりの強い粘質土
炭化物混入 レキ(小)含む
- ②. 2.5Y6/3 にぶい黄
しまりのある粘質土
レキ(大)含む
- ③. 2.5Y5/2 暗灰黄
しまりのある粘質土

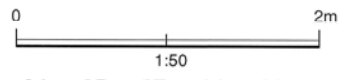


- I 10YR3/3 暗褐色
しまりの弱い砂質シルト
- I-1 10YR3/3 暗褐色
しまりの弱い砂質シルト
0.5cm角の風化礫含む
炭化物混入
- II 10YR4/2 灰黄褐色
しまりの強い砂質シルト
- III 10YR3/2 黒褐色
ややしまりのある砂質シルト
炭化物混入
- III-1 10YR4/3 にぶい黄褐色
ややしまりの強い砂質シルト
にぶい黄褐色
- IV 10YR5/4 しまりの強い砂質シルト入

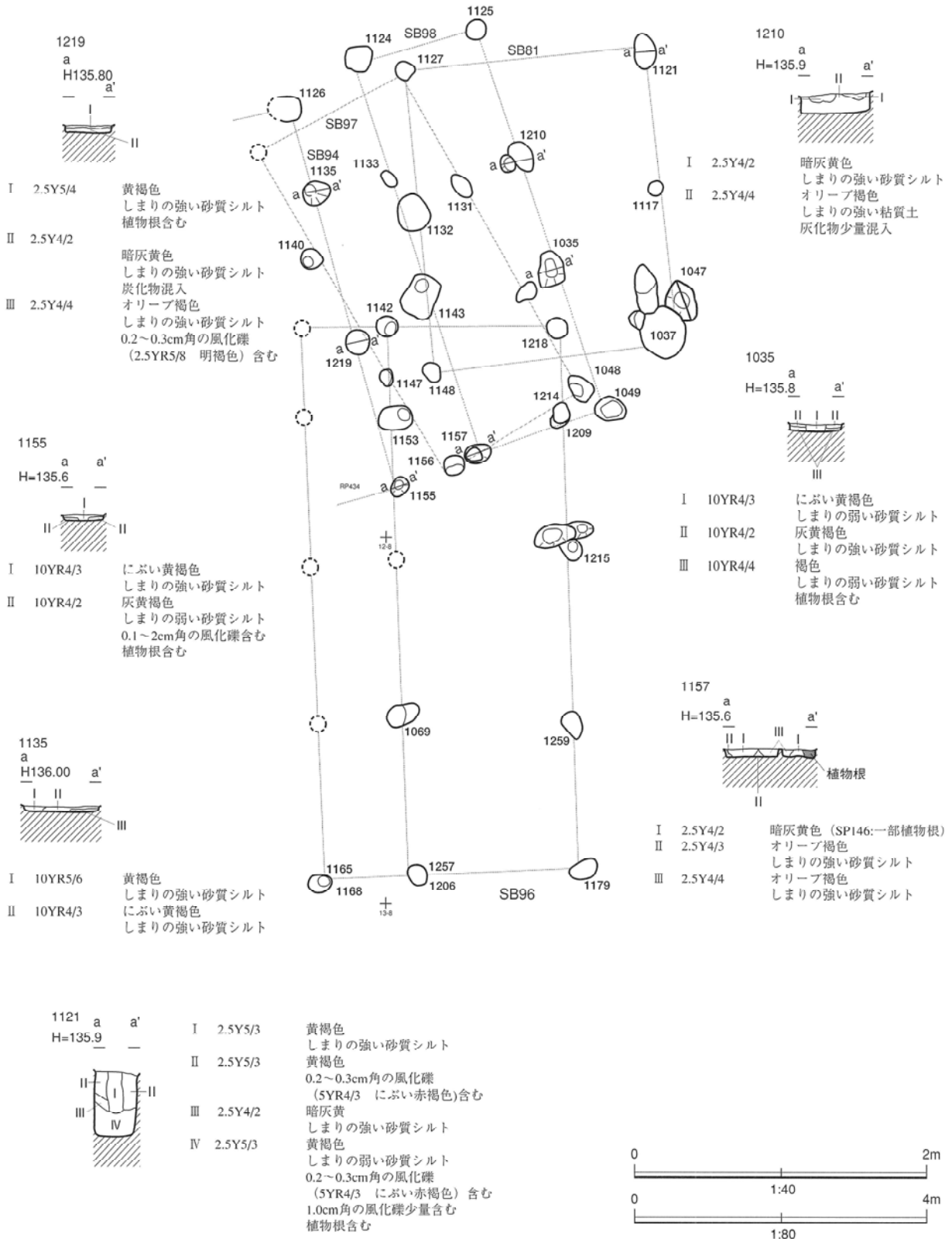
1047
NW
H=135.1 SE a'



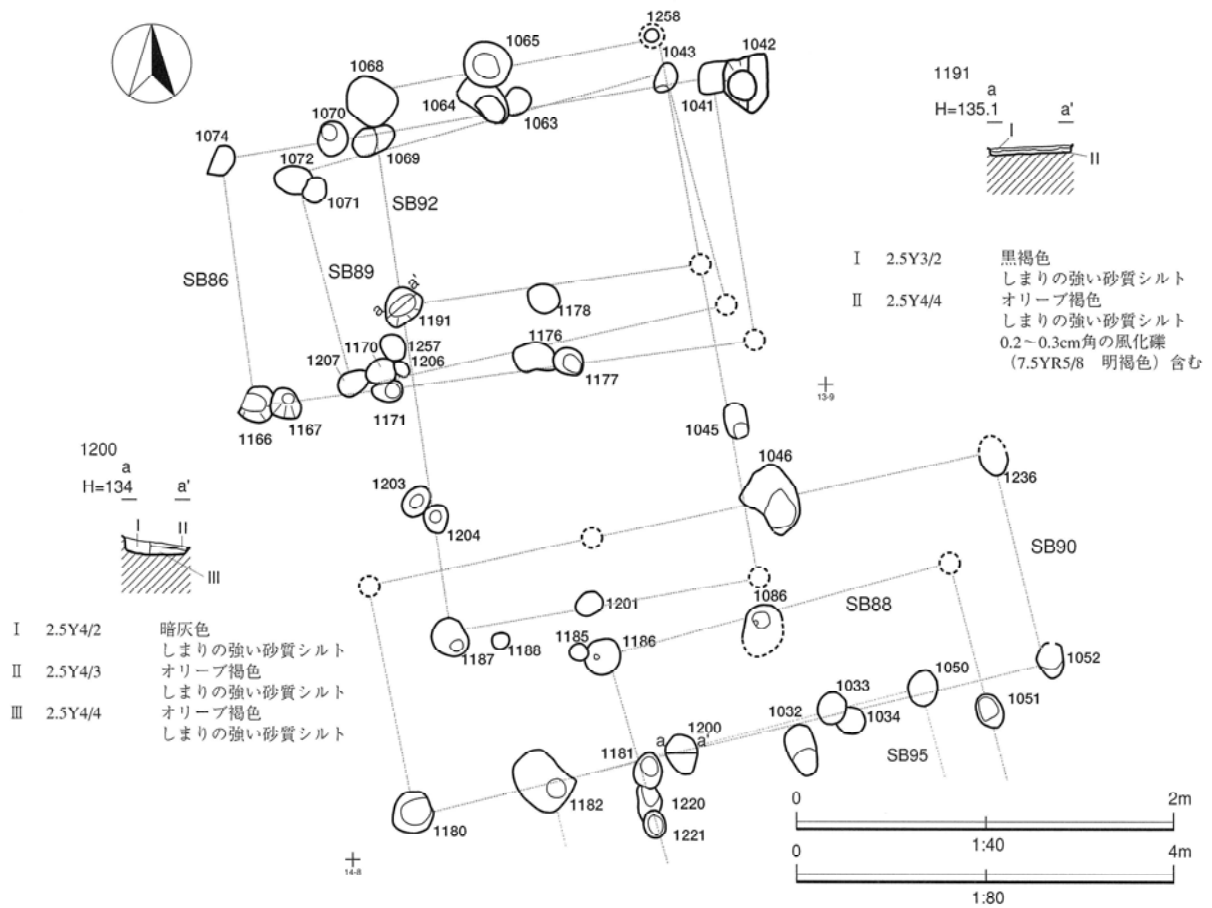
- ①. 2.5Y4/2 暗灰黄
しまりのある粘質土
- ②. 2.5Y5/3 黄褐
しまりのある粘質土



第8図 掘立柱建物 SB80・82・83・84・85・87・91・93・95



第9図 掘立柱建物跡 SB81・94・96・97・98



第10図 掘立柱建物跡 SB86・88・89・90・92・95

4 遺物

左沢楯山城跡の出土遺物について、これまで出土した土器・陶磁器を中心として検討を行った結果、3磁器に分類できる。 遺物の年代

I期（12世紀～13世紀）

手づくねのかわらけを主体とする時期である。この時期は築城以前のものであり、この段階から城内の一部が使用されていたことが分かる。出土量が少ないので、短期間の利用と考えられる。

II期（15世紀後半～17世紀前葉）

中国産の貿易陶磁器を中心とした組成である。15～16世紀代のものが多い。この時期は城館として利用された時期と一致しており、左沢楯山城の年代を示すものである。この時期の遺物は調査全区域に広がっているため、この時期に城内全域が利用されたことが分かる。

III期（18世紀以降）

国産の肥前系陶磁器を中心とする組成である。この時期は城館としての機能が失われた時期のものである。

この分類を基に遺物の検討を行う。今年度の出土した遺物は54点であり、その内陶磁器片が40点、鉄製品が14点である。

朝鮮（第11図）

朝鮮の陶器は2点出土している。412はSK12より出土し、内外面高台内灰釉、豊付無釉の碗である。見込に砂目が2箇所確認できる。唐津と類似しているが、高台内にも釉が確認できるため朝鮮かと考えられる。もう1点出土している遺物はSK12の北側攪乱部分より出土し、412と接合する。いずれも16世紀末の時期を示し、左沢楯山城の時期であるII期の遺物である。 朝鮮

唐津（第11図）

唐津は全部で5点出土している。413は内外面灰釉の溝縁皿である。17世紀前半（1610～1650）の時期を示す。419は外面白泥、一部鉄釉、銅緑釉の二彩手の甕である。17世紀の時期を示す。422は、内外面白泥の二彩手の鉢かと考えられる。17世紀の時期を示す。431は、2点出土しているが、同じ陶器であると考えられる。内面灰釉、一部鉄釉、外面は口縁部白泥、一部銅緑釉の二彩手の鉢である。17世紀の時期を示す。いずれも左沢楯山城の時期であるII期の遺物である。 唐津

413・419はSK12内より出土し、431・422は調査区の上段東側より出土している。

織部（第11図）

織部は調査区下段石積み部分より1点出土している。429は、口縁部内外面銅緑釉、内面長石釉であり、口縁部に櫛描文、波状文が施される口縁部輪花の皿である。17世紀初の時期を示し、左沢楯山城の時期であるII期の遺物である。 織部

須恵器（第12図）

須恵器はSK12内より1点出土している。401は内外面ロクロナデ、底部が回転糸切の無台坏である。9世紀の時期を示す。築城以前の時期の遺物である。 須恵器

土製品 土製品 (第13図)

土製品は調査区上段西側より1点出土している。424は有孔円板であり、その用途は紡錘車かと考えられる。時期は不明である。

鉄製品 鉄製品 (第13図)

鉄製品は全部で14点出土している。439・440・441・442・443・446・448・449は鉄釘である。444と447は刀子である。鉄滓も3点(450・451・452)出土している。445は不明である。釘については掘立柱建物の建築部材として使用されたと推測される。

国産陶磁器 国産陶磁器 (第11～12図)

国産陶磁器は、全部で31点出土している。404は内外面透明釉であり、外面に草花文が施される肥前系の染付である。近世後半の時期を示す。その他は18世紀以降または近代の肥前系または在地系の陶磁器である。廃城となった後に開墾されて畑などに利用され、現代に至るまでさまざまな遺物が混入したと考えられる。いずれも城館としての機能がうしなわれたⅢ期の遺物である。

調査地の遺物 出土遺物の年代については、16世紀末から17世紀である。左沢楯山城の年代を示すⅡ期の年代のものである。Ⅱ期の遺物が集中して出土した箇所が調査区の南端であり、遺構の一部しか確認できておらず、遺構の性格が不明確であるため、調査区を広げる必要がある。そして、これらの遺物に伴う遺構があるかどうか確認する必要がある。その他、9世紀の須恵器が1点出土している。Ⅲ期の18世紀以降の遺物については、廃城後現代に至るまで、様々な遺物が混入されたものであると考えられる。

表1 遺物観察表(1)


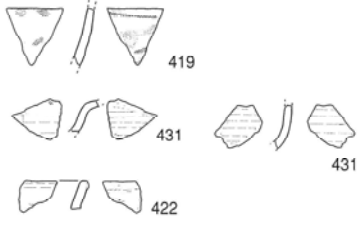
遺物番号	調査地区	出土位置	種類	器種	部位	計測値(mm)				産地	年代	備考
						口径	底径	器高	器厚			
401	AJTA1	SK12	須恵器	無台坏	胴部～底部	44.0			8.8	須恵器	9C	(色) 5PB4/1 暗青灰色 海綿骨針(軸色) 無釉 内外面 面ロクロナデ 底部 回転糸切 内外面底部に焼跡あり
402	AJTA1	SP1180	磁器	小杯	胴部～底部				3.1	肥前系	18C以降	(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 高台置付下 無釉 染付不明文
403	AJTA1	SK12	磁器	白磁皿	口縁部				3.3	近代	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明釉	
404	AJTA1	SK12	磁器	碗	胴部				4.8	肥前系	近世後半	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 染付草花 文
405	AJTA1	0907EE	瓦質土器	不明	口縁部				13.2		18C	(色) 7.5YR5/4 に近い褐色 (軸色) 内外面無釉 外面い ぶし
406	AJTA1	SK12	磁器	碗	口縁～胴部	105.0			3.7	肥前系	18C以降	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 染付植物文
407	AJTA1	0907DG	陶器	不明	胴部				2.6		18C以降	(色) 5Y7/2 灰白色 (軸色) 内外面透明釉
408	AJTA1	SK12	磁器	碗	胴部				4.2	肥前系	18C以降	(色) 5Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 外面染付丸 文
409	AJTA1	SP1114	磁器	皿	口縁部				3.6	肥前系	18C以降	(色) 5Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明釉
410	AJTA1	SK12	磁器	皿	口縁部	114.0			2.8	近代	(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 赤絵菊文 口縁部輪花	
411	AJTA1	0907ED	磁器	皿	口縁～底部	98.5	50	19	3.3	不明	18C以降	(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 高台置付下 無釉 印花獅子文
412	AJTA1	SK12	陶器	碗	底部				4.3	朝鮮カ	16C末	(色) 5Y6/2 灰オリーブ色 (軸色) 内外面高台内灰釉 2.5GY6/1 オリーブ灰色 置付無釉 見込に砂目2ヶ所
	AJTA1	SK12	陶器	碗	胴部					朝鮮カ	16C末	(色) 5Y6/2 灰オリーブ色 (軸色) 内外面灰釉 2.5GY6/1 オリーブ灰色
413	AJTA1	0907ED	陶器	皿	口縁部	146.5			3.7	唐津	16C前半 (1610～1650)	(色) 7.5Y6/1 灰色 (軸色) 内外面灰釉 2.5GY6/1 オリ ーブ灰色 溝縁皿
414	AJTA1	0907ED	陶器	壳	胴部				7.1		18C以降	(色) 7.5Y7/1 灰白色 (軸色) 外面鉄釉 10YR3/2 黒褐 色 1ヶ所縦に海鼠釉 内面火ハネ痕
415	AJTA1	0907ED	磁器	碗	口縁部				3.9	近代	(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内外面透明釉 染付植物文 [紫、赤、紺色]	

表1 遺物観察表(2)

遺物 番号	調査 地区	出土位置	種類	器種	部位	計測値 (mm)				産地	年代	備考
						口径	底径	器高	器厚			
416	AJTA1	SD16	陶器	土瓶カ	胴部				5	在地系	18C以降	(色) 10YR7/4 におい黄褐色 (軸色) 内面灰軸 5Y6/2 灰オリーブ色 外面無軸 煤付着
417	AJTA1	0907DD	陶器	瓶類	口縁部	11.1			2.4		18C以降	(色) 7.5Y5/2 灰オリーブ色 (軸色) 内外面鉄軸 10YR4/3 におい黄褐色
418	AJTA1	0907	磁器	不明	口縁部				4.7	肥前系	18C以降	(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内面口縁部・外面透明軸
419	AJTA1	0907	陶器	甕	胴部				6.5	唐津	17C	(色) 2.5YR4/3 におい赤褐色 (軸色) 外面白泥 鉄軸 銅緑軸 外面7.5YR8/1 灰白色 内面10Y6/1 灰色 二彩手
420	AJTA1	SD12	磁器	皿	胴部~底部	88.5			6.6	肥前	19C	(色) 7.5Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明軸 畳付高台 内一部無軸 蛇ノ目門形高台 内面底部 染付雪輪笹文
421	AJTA1	SK11	ガラス	薬瓶類カ 化粧瓶カ	口縁部						18C以降	
422	AJTA1	0907EF	陶器	鉢	口縁部				7.6	唐津	17C	(色) 5YR5/3 におい赤褐色 (軸色) 内外面白泥 5Y8/2 灰白色 二彩手カ
423	AJTA1	0907ED	磁器	不明	胴部				3.2		18C以降	(色) 10Y8/1 灰色 (軸色) 内外面透明軸 外面10GY7/1 明緑灰色
424	AJTA1	0907DE	土器	有孔円板	全形				9.5			(色) 7.5YR5/4 におい褐色
425	AJTA1	0907DF	磁器	瓶類	胴部				3.3		18C以降	(色) 10Y7/1 灰白色 (軸色) 外面透明軸 内面無軸 染付植物文
426	AJTA1	0907DF	磁器	小杯	口縁部				3.7	近代		(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明軸 赤絵
427	AJTA1	0907FF	磁器	皿	底部				5.4	近代		(色) 10Y7/1 灰白色 (軸色) 内外面透明軸 染付青梅波、植物文
428	AJTA1	0907ED	陶器	碗	口縁部	128.0			3.3			(色) 10YR7/4 におい黄褐色 (軸色) 内外面無軸 玉緑口縁
429	AJTA1	0907ED	陶器	皿	口縁部				5.3	織部	17C初	(色) 2.5Y8/3 淡黄色 (軸色) 口縁部内外面銅緑軸 10Y6/2 オリーブ灰色 内面長石軸 2.5Y8/3 淡黄色 口縁部輪花 口縁部 柳描文、波状文
430	AJTA1	SP1089	陶器	碗	胴部				4.6		18C以降	(色) 5YR6/3 におい橙色 (軸色) 外面灰軸 10YR6/3 におい黄褐色 内面白軸 5Y8/1 灰白色
431	AJTA1	SP1088	陶器	鉢	胴部				6.7	唐津	17C	(色) 10YR6/3 におい黄褐色 (軸色) 内面灰軸 5Y5/3 灰オリーブ色 内面一部鉄軸染 7.5YR3/1 黒褐色 外面口縁部白泥 10Y7/1 灰白色 銅緑軸 7.5Y6/3 オリーブ黄色 二彩手
	AJTA1	SD14	陶器	鉢	胴部				6.2	唐津	17C	
432	AJTA1	SP1086	磁器	皿	口縁部	136.0			2.8	肥前系	18C以降	(色) 5Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明軸 角形
433	AJTA1	0907ED	磁器	白磁皿	口縁部				3.2	近代		(色) N8/0 灰白色 (軸色) 内外面透明軸
434	AJTA1	0907DF	陶器	土管類	胴部				8.9	近代		(色) 10YR5/3 におい黄褐色 (軸色) 内面鉄軸 10YR3/2 黒褐色
435	AJTA1	SD10	磁器	皿	底部						18C以降	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面無軸 内面不明文 布目痕 前面磨減
436	AJTA1	SD15	磁器	瓶類	胴部				2.05		18C以降	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 外面内面上部透明軸 染付園線
437	AJTA1	0907EE	陶器	小杯	口縁部				3.3		18C以降	(色) 5Y8/2 灰白色 (軸色) 外面透明軸 内面無軸
438	AJTA1	0907FF	磁器	不明	口縁部				2.4		18C以降	(色) 10Y8/1 灰白色 (軸色) 内外面透明軸

遺物 番号	調査 地区	出土位置	種類	器種	部位	計測値 (mm)		
						長さ	幅 (径)	厚さ
439	AJTA1	0907FF	鉄製品	釘		134.0	5.95	5.95
440	AJTA1	0907FD	鉄製品	不明		126.0	7.1	7.1
441	AJTA1	0907FF	鉄製品	釘		92.0	11.5	7.5
442	AJTA1	SP1111	鉄製品	釘		69.5	10.9	10.9
443	AJTA1	SK14	鉄製品	不明		79.0	12.0	8.0
444	AJTA1	SP1090	鉄製品	(刀子)		93.5	24.5	4.0
445	AJTA1	SD13	鉄製品	不明		100.0	13.0	4.5
446	AJTA1	0907EF	鉄製品	釘		59.5	11.0	7.0
447	AJTA1	SD13	鉄製品	(刀子)		109.0	27.5	6.0
448	AJTA1	0907DE	鉄製品	釘		69.0	7.5	7.5

表 2 出土陶磁器変遷表

	肥前系磁器	朝鮮	織部	唐津
16C末		 412		
17C初			 429	
17C 前半 (1610~1650)				 413
17C				 419 431 431 422
近世後半	 404			
19C	 420			

5 まとめ

これまで発掘調査により検出された左沢楯山城跡の掘立柱建物跡は、切り合い関係が不明のものも多く新旧関係を明確にすることが難しいが、平面形や建物の配置から、その変遷を辿ることができる。特に掘立柱建物が重複して検出されたC8から、2棟であった建物が1棟にまとまり、庇や回廊を伴い洗練されていくという変遷が考えられる。

掘立柱建物の変遷

今年度調査を実施した元屋敷については、十分な検討が必要であるが掘立柱建物の柱穴の切り合いより数期の時期変遷が推測される。平面形や建物の配置から、変遷を見るとC8のような明確な変遷を辿ることはできないが、庇や角屋が伴うなどの若干の変遷を見ることができ。しかし、C8（迎賓施設）やC4（主殿）で確認される規模が大きく庇や回廊を伴うような格が高い、上級の建物ではなく、住宅というよりは、山城内でも見られるような倉庫系の建物である可能性が高い。

A1の掘立柱建物

これまで調査を実施した山城部分から出土した遺物から確認できる左沢楯山城跡の時期については14世紀のものは見られず、15世紀以降のものが主体となっている。A1についても、特に掘立柱建物が重複する調査区の上段東側からは、17世紀の唐津（二彩手）の鉢、調査区下段西側のSK12からは16世紀末朝鮮の陶器碗、17世紀前半（1610～1650）唐津の溝縁皿、17世紀唐津（二彩手）の甕、調査区下段東側の石積部分からは17世紀初の織部の皿が出土している。左沢楯山城の活動活発になる時期、Ⅱ期の遺物が出土している。その他、須恵器の無台杯や18世紀以降の陶磁器片が出土している。18世紀以降の陶磁器片は、廃城後に畑として利用され、様々な遺物が混入したと考えられる。

左沢楯山城の遺物

左沢楯山城の活動が活発になるのは15世紀後半以降であると考えられる。この時期に伊達氏が大江氏への攻勢を強め、寒河江城が脅かされていった。それに伴い、左沢楯山城も臨戦態勢に入っていく。その後、最上氏に代わり左沢藩主となった酒井直次が新しい城を築き1624年（推定）左沢楯山城は廃城となる。よって左沢楯山城が実質的に機能していたのは約140年間程度と推測される。

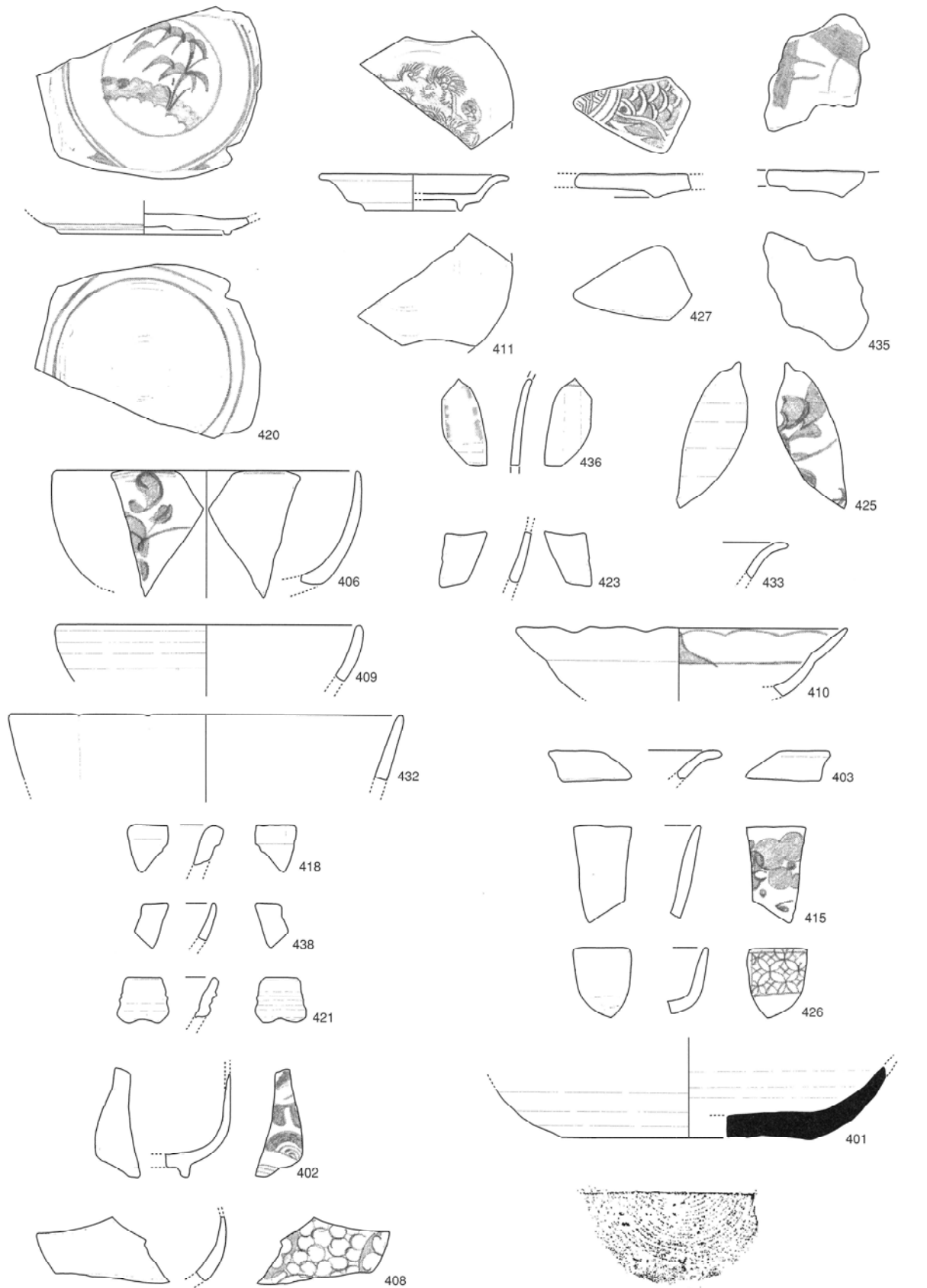
左沢楯山城の時期

元屋敷A1は、出土遺物や遺構などから、16世紀以前から利用され変遷しながら、16世紀後半の八幡座（C4）周辺や寺屋敷（C8）周辺、千畳敷（B1）周辺が機能する左沢楯山城の活動が活発になるのと共通の時期に倉庫的・作業場的に活用され、廃城とともに終了していると推測される。左沢楯山城の時期と一緒に使用されたと考えられる。想定していた居館跡、寺院は確認することはできなかった。

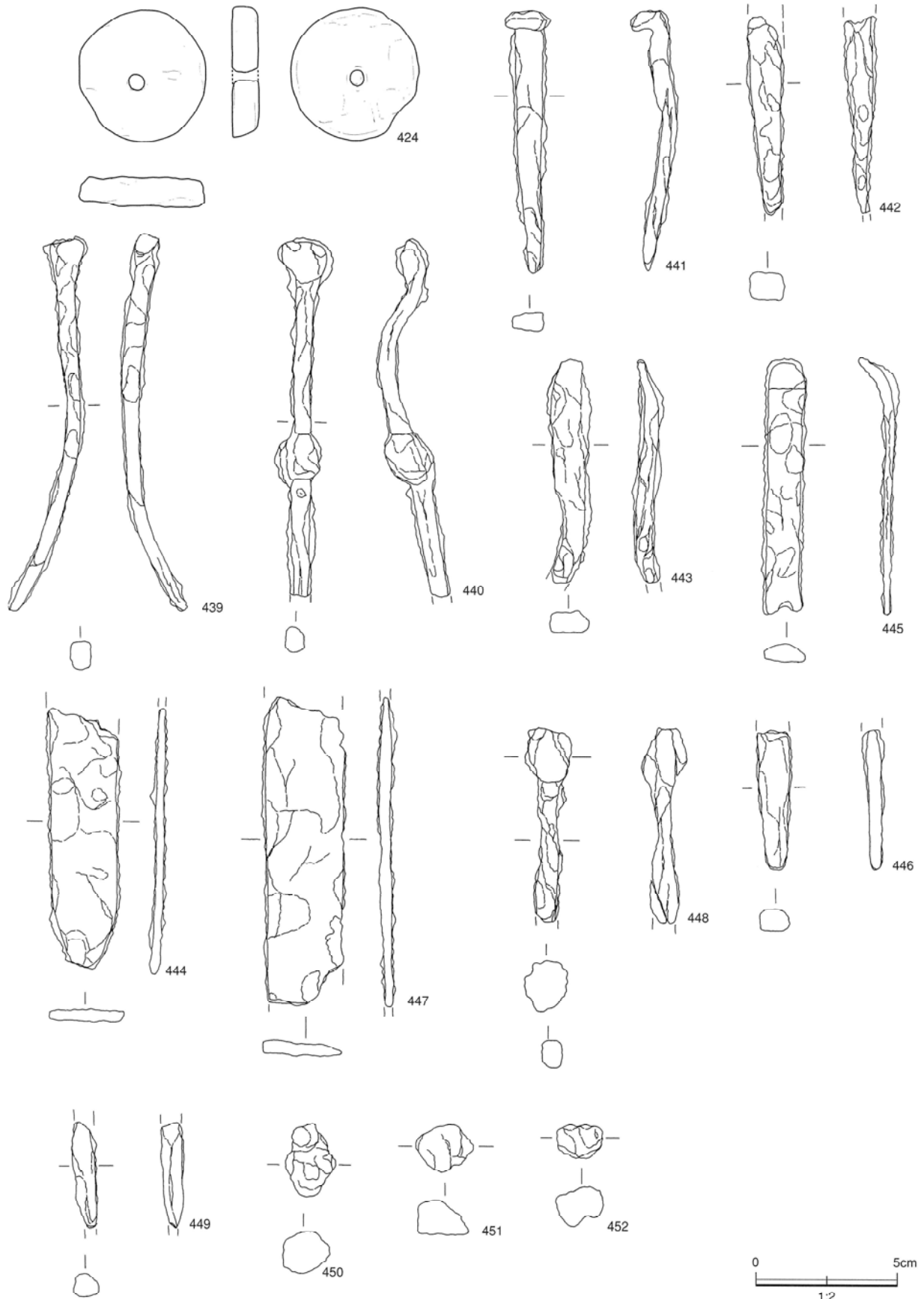
ま と め



0 5cm
1:2
第11图 出土遺物 (1)



第12図 出土遺物 (2)



第13図 出土遺物 (3)

写真図版



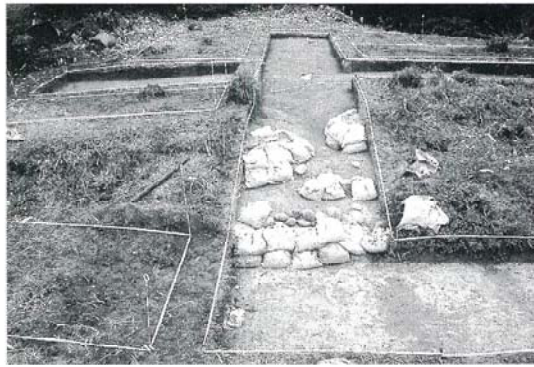
調査前曲輪の状況（北から）



平成18年度試掘調査トレンチ完掘状況（南西から）



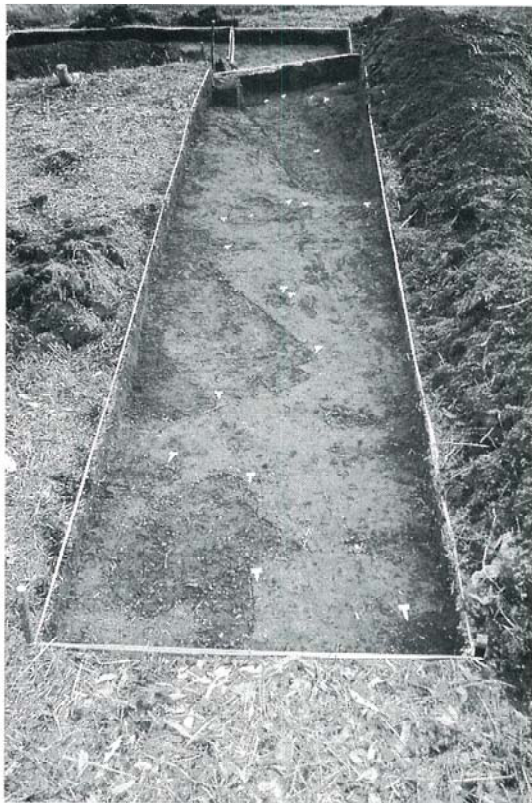
調査前石積み確認状況（南から）



平成19年度調査区設定状況（南から）



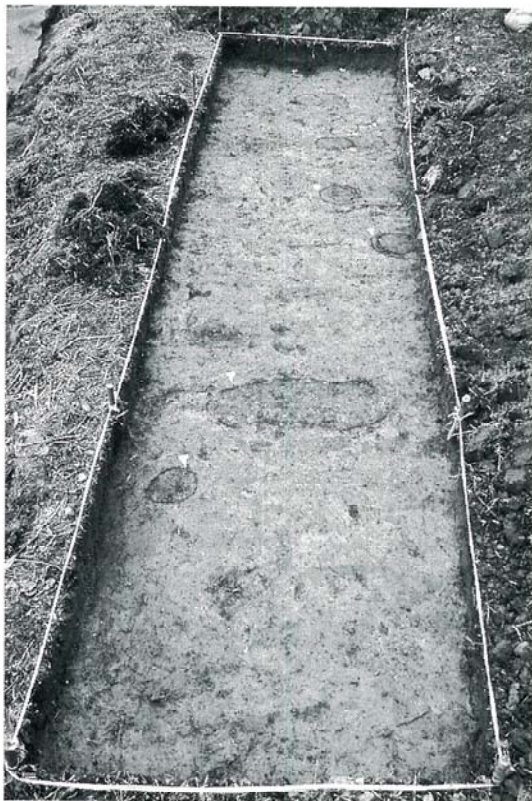
平成19年度調査区設定状況（南東から）



南北トレンチ遺構検出状況（北から）



東西トレンチ上段東側遺構検出状況（東から）



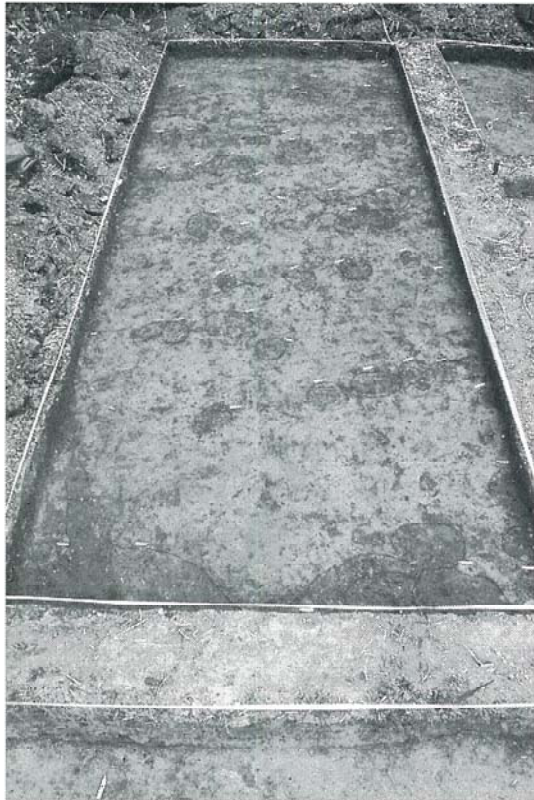
東西トレンチ下段遺構検出状況（東から）



平成18年度試掘調査時石積み部分検出状況
（南から）



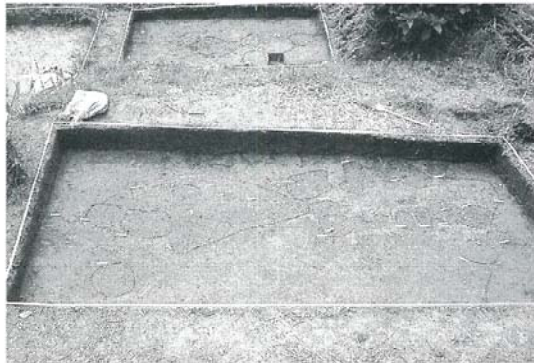
東西トレンチ上段東側遺構検出状況（西から）



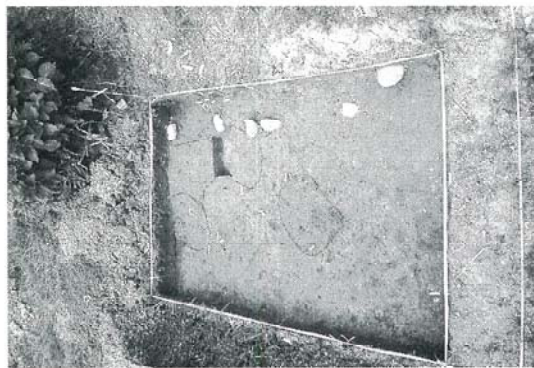
南北トレンチ遺構検出状況（南から）



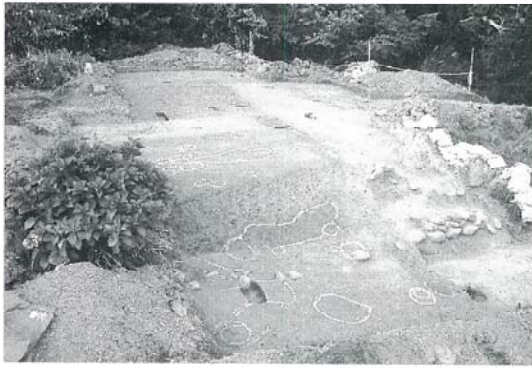
東西トレンチ上段東側遺構検出状況（南から）



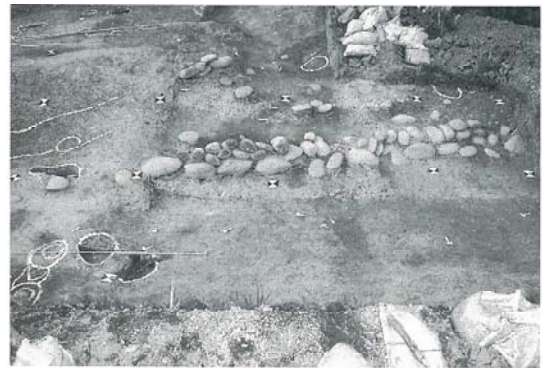
東西トレンチ上段西側遺構検出状況（北から）



東西トレンチ下段西側遺構検出状況（南から）



調査区西側遺構検出状況（南西から）



調査区南側石積み部分検出状況（南から）



調査区北側遺構検出状況（北西から）



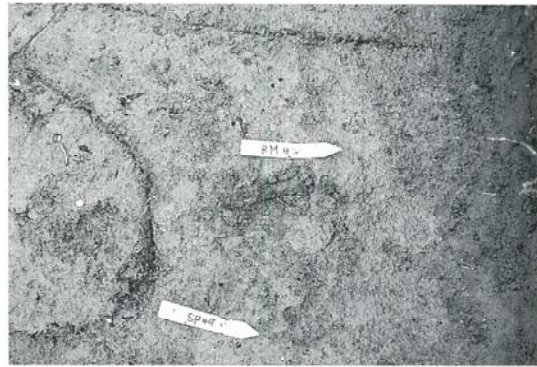
遺構検出状況（南から）



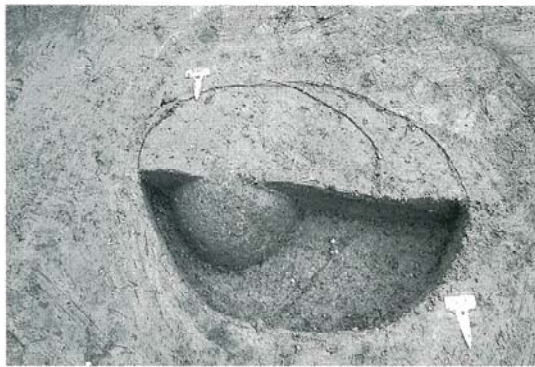
建物跡検出状況（南西から）



SP1097、1098、1099、1100 検出状況



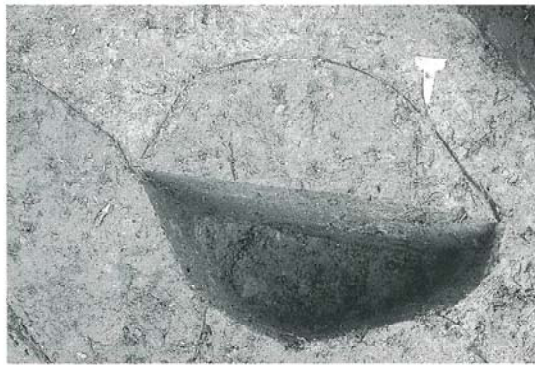
RM445 出土状況 (SP1068 より出土)



SP1042 検出状況



SK12 遺物出土状況



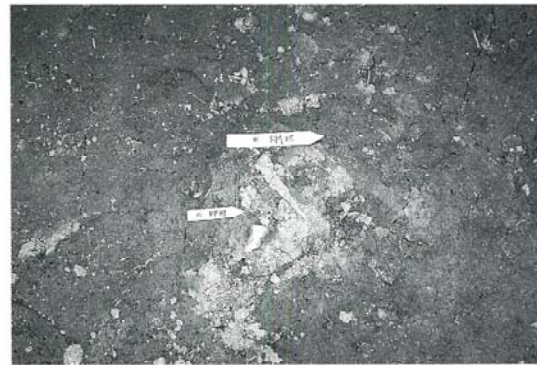
SP1047 検出状況



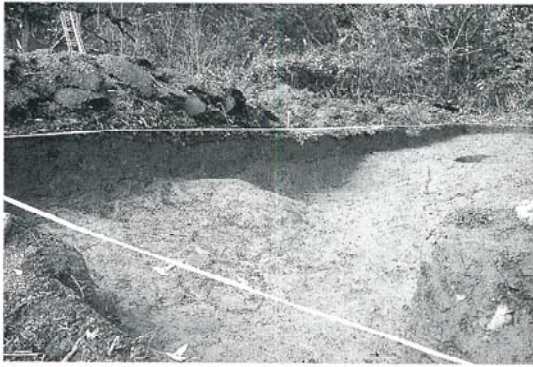
RP429 出土状況



SP1095、1096 断面



RM441・RP422 出土状況



調査区上段西壁基本層序（南東から）



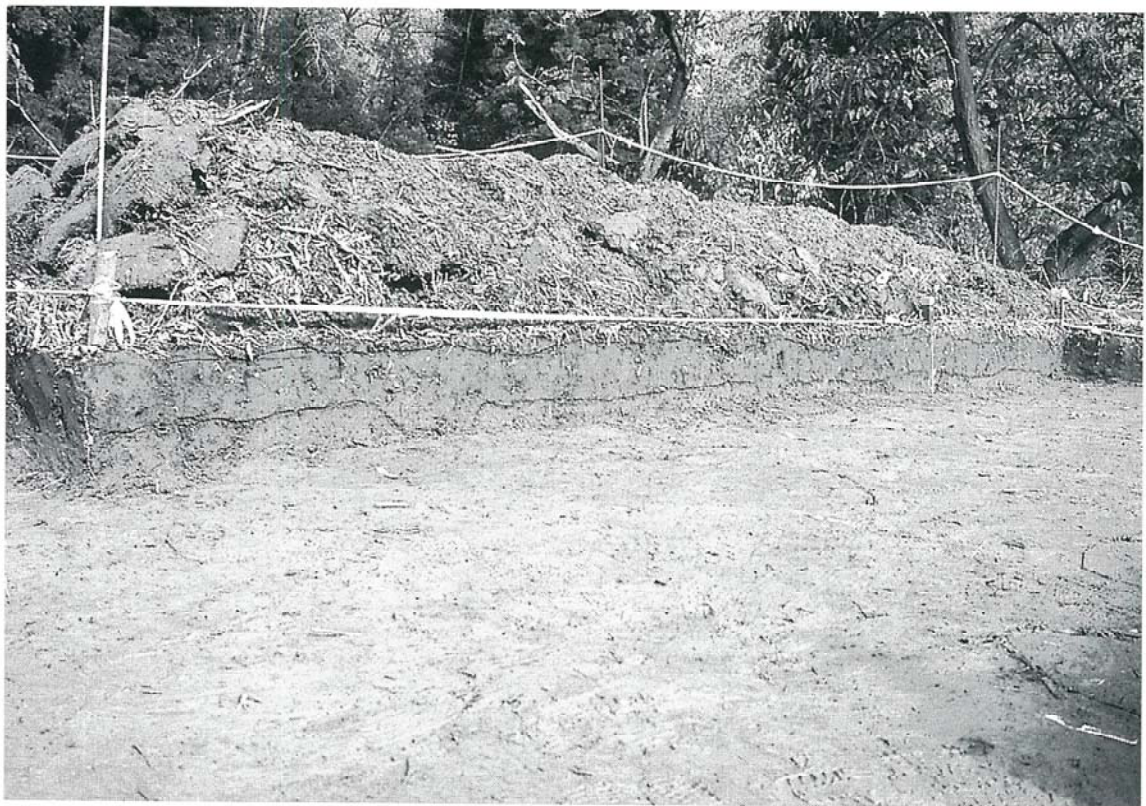
調査区上段西側北壁基本層序（南西から）



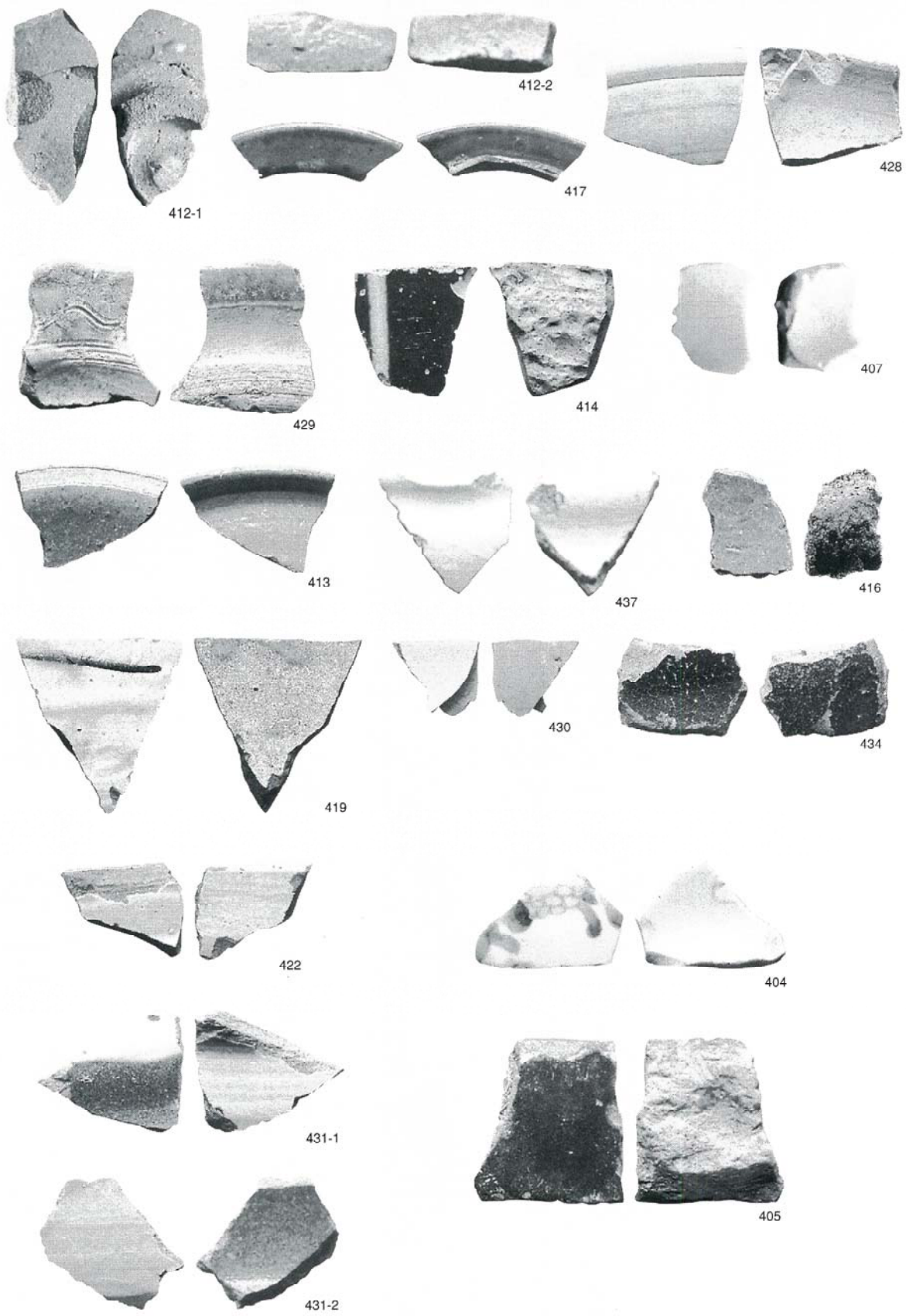
調査区上段東側北壁基本層序（南西から）



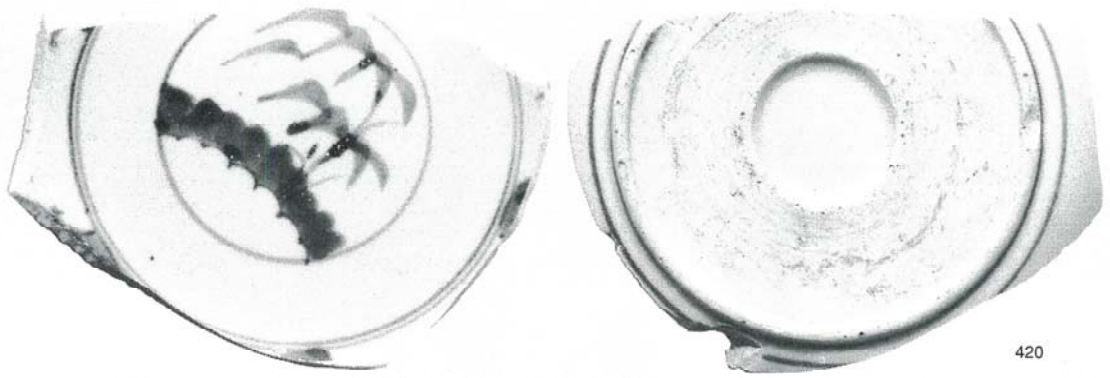
調査区下段南壁基本層序（東から）



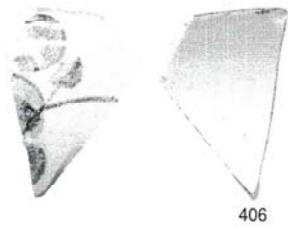
調査区上段東側北壁基本層序（南西から）



出土遺物 (1)



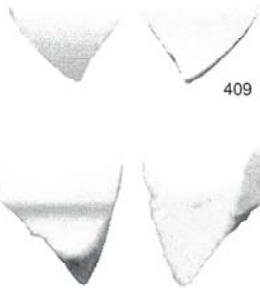
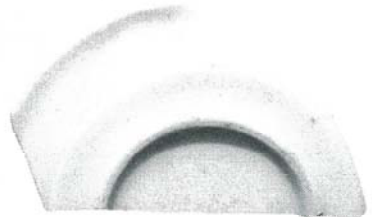
420



406



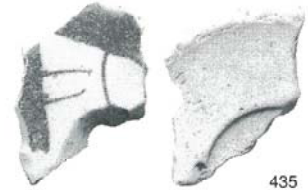
411



409



427



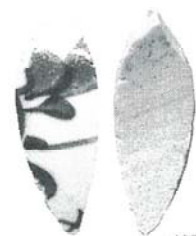
435



418



436



425



438



423



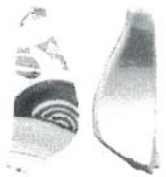
433



421



432

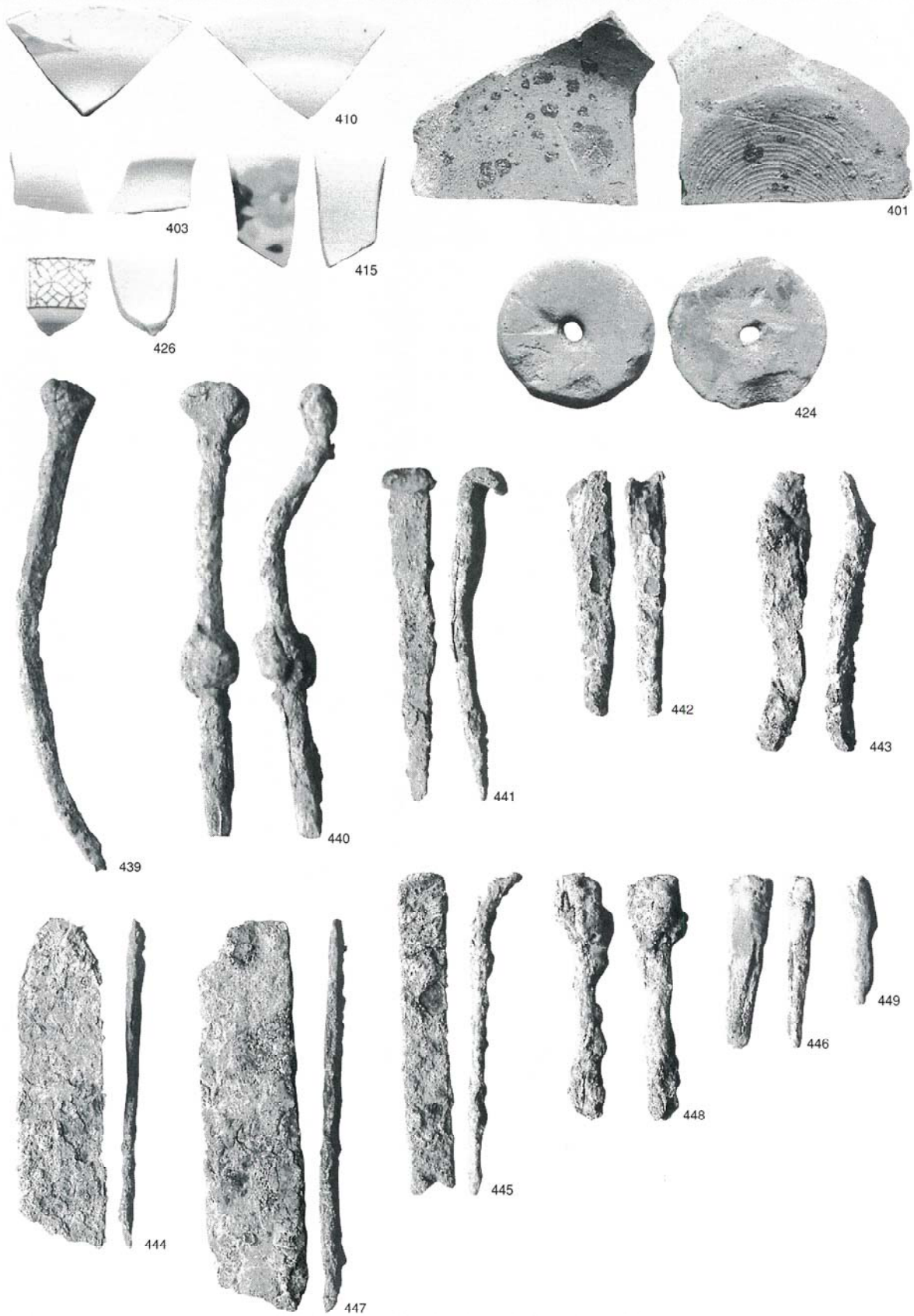


402



408

出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょうあと							
書名	左沢楯山城跡調査報告書 (10)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 11 集							
編著者名	日下部美紀							
編集機関	大江町教育委員会							
所在地	〒 990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁 373-1							
発行年月日	2008 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょうあと 左沢 楯山 城跡	やまがたけんにしむら 山形県西村 やまぐんわお え まち 山郡大江町 おおあざあてらざわ 大字左沢 あざたてやま 字楯山	324	001	38° 23′ 05″	140° 13′ 00″	071107 ~ 071128	165.0 ㎡	学術調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡	中世～近世	掘立柱建物跡 土坑跡		陶磁器 鉄製品		掘立柱建物跡 19 棟が検出された。 溝跡 8 条、土坑 4 基が検出された。		

大江町埋蔵文化財調査報告書 第11集

山形県西村山郡大江町

あてらざわ
左沢楯山城跡調査報告書 (10)

発行日 平成20年(2008年)3月31日

編集・発行 大江町教育委員会

山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1

印刷 寒河江印刷株式会社

山形県寒河江市中央工業団地58番地